

二葉館あれこれ Vol.16

ステンドグラスの歴史

展示室1「アルプス」



ステンドグラスを見に行くと考えた時、どのような施設を連想されるでしょうか。おそらくはキリスト教の教会を

はじめとした宗教的な建物を想像されるのではないのでしょうか。実際、現在日本でみられるステンドグラスの多くは教会にあり、日本で最も古いものの一つと考えられていたステンドグラス「十字架のキリスト」も長崎の大浦天主堂にあります。

二葉館のステンドグラスを改めて見ると、大広間の「初夏」をはじめとして、展示室1の「アルプス」や展示室7の「もみじ」も風景を描いたようなデザインであり、宗教的なイメージは感じられません。これらの二葉館にある作品がどのような経緯から生み出されたのか。その歴史の一端に触れてみたいと思います。

ステンドグラスは5世紀ごろから作られたと考えられており、現存する世界最古のステンドグラスはドイツのロルシュ修道院跡で発掘されたキリストの頭部とみられるガラス片で、9世紀のものと考えられています。ステンドグラスのもたらす様々な色光は神の光とされ、キリスト教の発展と共に広まってきました。最盛期といわれる11〜15世紀の間に現在でも有名なステンドグラスを持つ建造物が次々に建てられています。その中でガラスや顔料の製造技術が発達し、より複雑で細かい表現が可能になって



展示室7「もみじ」

芸術作品として新たな展開を見せている時、日本に伝来し製作され始めたステンドグラス。その中で、二葉館にある作品たちは生み出されたのです。川上貞奴と福沢桃介がこの館を建てることになったその時代だからこそ生み出された芸術といえるでしょう。

いきました。しかし、絵画がより写実的になっていくのと同じ時に、ステンドグラスも写実的な作品が作られるようになりまし。そのためステンドグラスの持つ光の透過性の意味が薄れ、ガラスをつなぐ鉛線はその作品にとっていらぬものとなり、ステンドグラスは衰退していきました。産業革命以後、安価で粗悪な商品が生み出されていく中、19世紀後半に、詩人やデザイナーなど多方面で活躍したウィリアム・モリスは、生活と芸術の統一を主張し、経営するモリス商会でステンドグラスをインテリアとして製作販売し、新たな息吹がもたらされました。宝石商として有名なティファニーの2代目、ルイス・コンフォート・ティファニーは、彫刻のような立体的な造形を作り出し、ステンドグラスをランプシェードに利用し、「ティファニーランプ」と呼ばれる芸術作品を生み出していきました。日本にステンドグラスが伝来したのが19世紀、日本人が学び始めたのがまさにこの時代でした。

文化のふらりさんぽ 16 「高岳駅」



オオカンザクラの並木道

文化のみち二葉館からふらりと足をのびせる施設・名所をご案内しているこのコーナーですが、今回は少し趣向を変えて、二葉館の最寄り駅となる高岳駅について紹介します。

高岳駅は、地下鉄桜通線で名古屋駅から徳重方面へ向かって4つ目の駅にあたります。桜通線は、名古屋営地下鉄の中でも比較的新しい路線で、平成元(1989)年に開通しました。先に開通していた他の地下鉄を避けて通るようにつくられていたため、現在、名古屋営地下鉄の中では最も深い場所を通る路線となっています。「高岳」という駅名は、かつてこの辺りの地名だった高岳町(現東区泉1丁目、2丁目、東横1丁目、2丁目)から付けられました。高岳町の由来は、駅の1番出口から北へ5分程歩いたところにある持名山高岳院というお寺です。高岳院は、徳川家康の八男でわずか6歳にして亡くなった仙千代を弔うための菩提寺で、古くから敬われながら地域に親しまれています。町名が変わった現在では「高岳」の名は駅名と駅のすぐ西側にある国道41号の交差点の名に



高岳駅の2番出口

その名残をとどめています。高岳駅から二葉館へ向かうには、2番出口を利用します。出口を出て、ひとつ目の信号を左手に曲がると、オオカンザクラの並木道が現れます。このオオカンザクラは、名古屋で一番早く咲くザクラの名所と言われており、3月中旬頃になると、ひと足早い満開のザクラを見る為に、県内外から多くの人々が訪れます。1.4kmにわたる140本以上が続くオオカンザクラやカンヒザクラの木々は、春は華やかに私たちの目を楽しませてくれ、夏には歩く私たちに涼しい木陰を作ってくれます。

このオオカンザクラの並木道に沿って12分ほど歩くと、右手に見えてくるオレンジ色の屋根が特徴的な建物が、当館、文化のみち二葉館です。地下鉄を含む名古屋営交通は、大正11(1922)年の市営交通事業誕生から、今年で100周年を迎えます。皆さんもぜひ、地下鉄やバスを使って、ふらりと名古屋を散策してみませんか。

IRODORI いろどり



化粧箱 普段の展示では四角い箱に見えますが、手前の蓋を上上げると中には小引き出しがあり、蓋の裏には鏡が張られています。この化粧箱、とても精巧に作られており、指物師の技が活かされています。

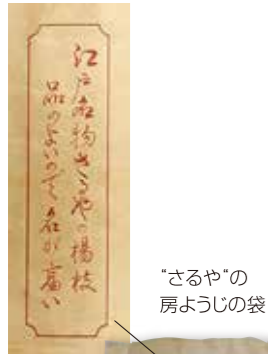
二葉館では貞奴に関する資料の展示をしています。今回は、展示室3にある貞奴の日用品から当時の様子を紹介します。

化粧道具

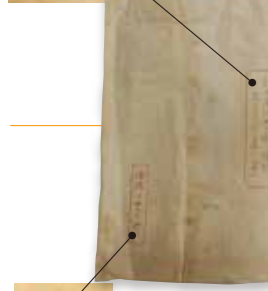


展示ケースには、日用品として貞奴が愛用していた化粧道具が展示されています。これは先に紹介した化粧箱に収められていました。髪を結い上げに使われていた櫛、Uピン、まゆ墨、紅、耳かき、握りばさみ、そして左端は、房ようじ、歯ブラシが一般的になる前に使われていたものです。この房ようじは、現存する楊枝の老舗、日本橋の「さるや」の袋に入っていました。そうそう昔の人は爪も握りばさみで切っていましたね。

愛用品からは貞奴の日常が垣間見られ、その存在がより身近に感じられます。



“さるや”の房ようじの袋



楊枝はさるや

from Archives

書庫棟から 資料を守る

春から夏にかけて暑くなる時期に所蔵資料の天敵になるもの……それは、虫です。文化のみち二葉館の書庫は、重い扉で守られていますが、小さな虫は、扉の開閉時などにどうしても入ることがあります。虫は、資料にとって大敵なので、駆除することは大切な作業になります。

当館の文学資料室では、毎年、書庫の燻蒸作業を行います。また、その他にも、新しく寄贈された資料は、書庫に納める前に害虫駆除をした上で保管をするなど、対策に努めています。虫と同じくらい気を付けているのが、湿気と乾燥です。湿気が紙に悪いことは、皆さんもご存知だと思います。が、実は過度な乾燥も紙や布製品を傷めてしまうのです。展示の時も例外ではありません。電灯の熱などで温度の影響を受けやすい展示ケース内では、資料が乾燥しやすくなっています。時折、展示ケースをご覧になつたお客様から「あの水の入ったコッ



薄紙に包まれた雑誌資料

プはなあに？」とご質問を受けることがあります。これは、展示ケースの形状を考慮した上で、乾燥対策としてコップを設置しています。ちなみに、乾燥した書籍や書類などの資料は、のりが剥がれやすくなったり、紙がパリパリして割れやすくなったりしてしまいます。その他にも、経年劣化でどうしても形状を維持出来なくなってしまう資料もあります。文学資料室では、資料の所有者の痕跡がわかるように、例えばメモの跡や付箋など、寄贈された時点での状態を維持した保存管理をしています。その為、破れていたページを貼りつけたり、取れてしまった部品をくっつけたりすることはありません。古い雑誌や形状が変わってしまった資料は、劣化の進行をふせぐために、緩衝材で包んだり、薄紙で保護したりする作業を行います。皆さんも、ご自宅にずっと残しておきたい大切な本や資料がありましたら、ぜひ虫や湿気、乾燥に注意してみてくださいね。